

今を生きる子どもたち

貧困と格差の拡大のなかで

IV

④



北海道大学
教育学研究院教授

松本 伊智朗さん

「子どもの貧困」という問題に光があてられ、学習支援や「子ども食堂」などのとりくみが各地で広がってきました。そのこと自体はとても大事なことです。でも、それが貧困対策かというところ、それはどうでしょう。

それらは、貧困に起因する不利益を軽減しようというとりくみであって、貧困そのものをなくそうというものではありません。貧困対策といったときに、そういうものを含まない施策は考えにくいわけですが、貧困をなくしていくことを考

所得再分配と向き合う

えれば、根本的には、所得の再分配の問題につきあたります。

貧困なくす視点

労働者の賃金・労働条件、所得保障をどうするか。教育、住宅、医療など暮らしと健康に直接かわるものを個人が個別的に準備するのではなく、社会的に準備することが必要です。介護や保育もそうです。それらが社会的に整備されてこそ、個別の支援が生きてきます。言い方をかえれば、そうしたものの社会的な整備が遅れているから、ますます個別支援が必要な状態になってしまう。もちろん、個別支援によって確実に支えられている人が1人でも2人でもいることの意味は大きいのですが、貧困対策といった場合には、貧困そのものをなく

す動きがあるのかわからないのかということが問われてくると思います。

現状では、子育ての大きな部分を家族というしくみに依存している社会があります。子どもの保育・教育は親次第。そういう構造をどう変えていくか。子育てを社会で負担していくというのはどういうことか。

学習支援の問題でいえば、「勉強すれば貧困がなくなる」というアピールになっ

てしまわないか。「勉強できなくてもええやん」という発想がなくなってしまう。支援しても勉強できない子どもが「あなたのせいよ」と切り捨てられないか。勉強への意欲以前に生への意欲がそがれてしまっている貧困のただなかにいる子どもへの支援となりうるのか。

「貧困の連鎖を断つ」と

いう言い方には注意が必要です。連鎖という言葉から浮かび上がる貧困のイメージは、家族に焦点があたりやすく、世の中の不正を見逃ししやすい。

どんな世の中に

個別の家族の問題ではなく、子どもが不利益を継承していくような世の中ってどんな世の中や？という見方が必要です。

貧困をなくそうとすれば、所得の再分配に正面から向かわなければ。「日々、なんとかやっているけどしんどい」という人たちの生活をどう支えるか。親が稼げないのが悪いのではなく、子育てにお金がかかりすぎるのが問題です。保育料・教育費の無償化など、子育てにかかる費用を社会が負担するしくみをつくることです。(おわり)